

### 多自然川づくり取組事例

タイトル : 生物生息域に配慮しワンドを残した浚渫事業の合意形成～河川シミュレーションを使用		
水系/河川名 : 淀川水系	河川分類 : 中小河川	
河川の流域面積 : -	整備計画流量 : -m <sup>3</sup> /s	セグメント : 不明
事業 : 維持管理	事業開始年度 令和3年度	
目標設定 : なし	段階 : D(実施・施工時)	
課題・目的(主な) : 流下能力の確保、貴重種、特定動植物の保全、ワンド・たまり、池沼の保全・再生・創出		
工法(主な) : 掘削(河床)		
配慮事項(主な) : 委員会、協議会等の開催		

#### 背景・課題、目標設定

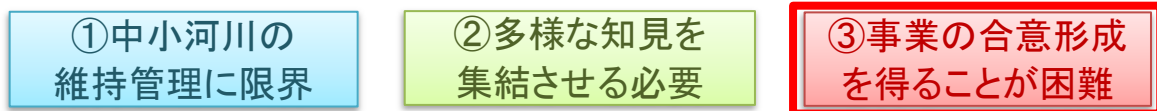
##### <背景・課題>

- 近年洪水・土砂災害の多くの自然災害が頻発化、激甚化、全国で浚渫事業が加速度的に推進。
- 一方、河川環境への配慮に関しては、1990(平成2)年に国からの通知により「多自然型川づくり」が始まった。さらに、1997(平成9)年には河川法の改正により、治水・利水とならび「河川環境の整備と保全」が河川管理の目的に追加。
- しかし、従来の浚渫手法は、堆積土砂を全面掘削し、上下流一律の画一的な標準横断面にするものである。  
⇒河川環境への配慮の観点から、自然環境を保全・創出するような浚渫手法を推進していかなければならない



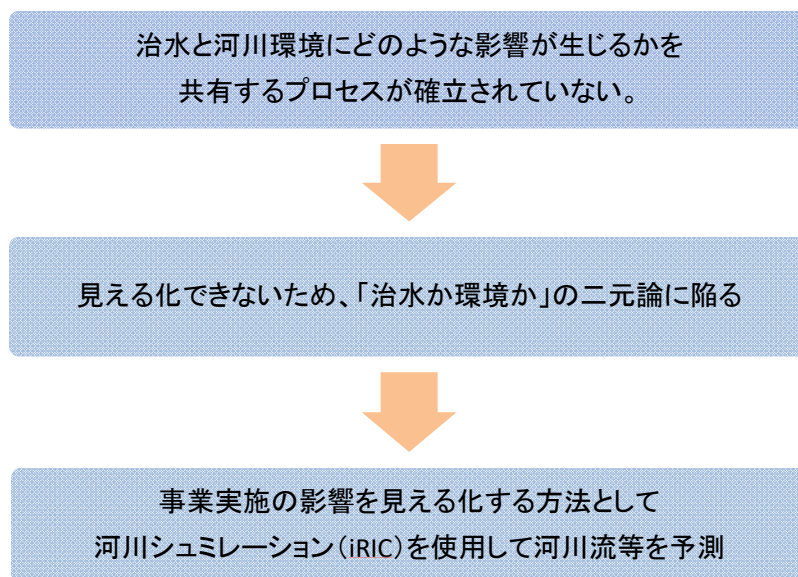
上下流一律の画一的な標準断面に

#### 多自然川づくりを進める上での障壁



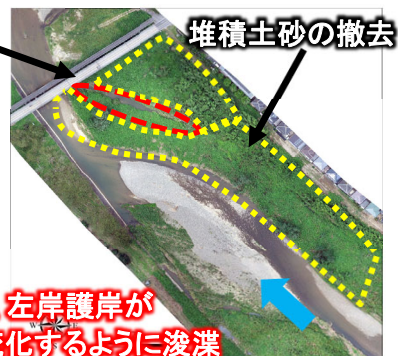
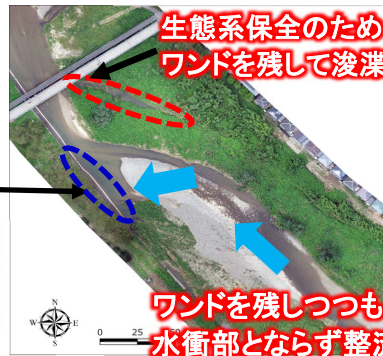
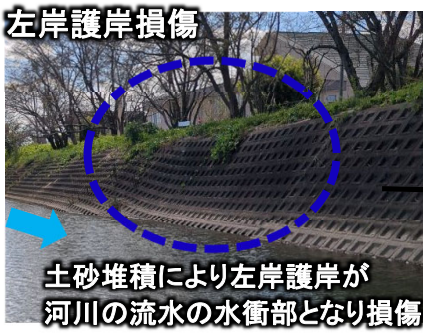
治水と環境保全是トレードオフの関係になることが多く、合意形成を得ることが課題

#### <目標設定>

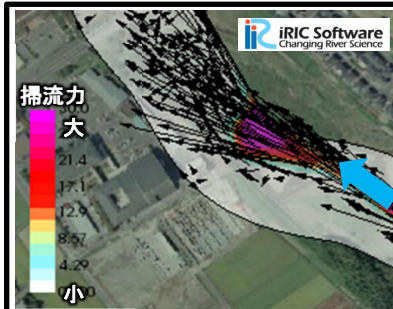


取組内容・対策例

左岸護岸損傷

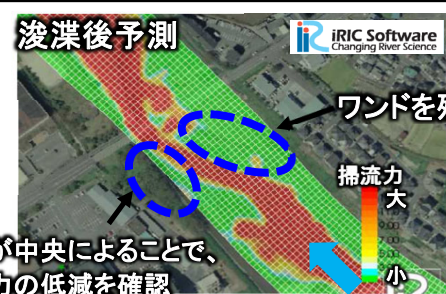
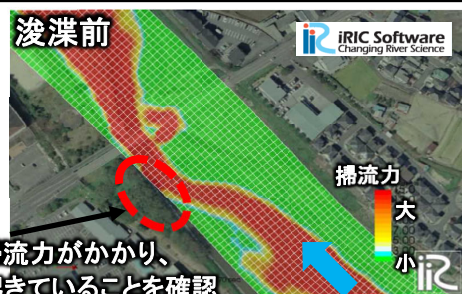


ワンドを残しつつも、左岸護岸が水衝部とならず整流化するように浚渫

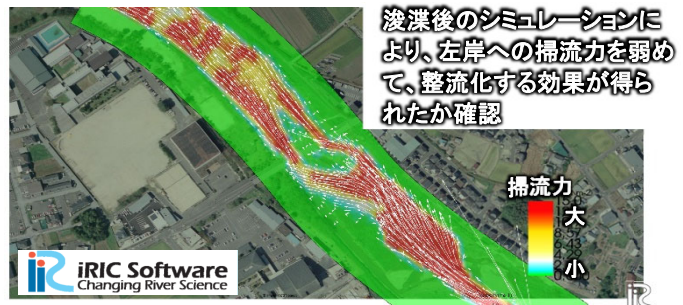


iRICを用いた河川シミュレーションにより掃流力等を可視化

- ・浚渫前のシミュレーションの結果、流速ベクトルは損傷した護岸に向かっていくことが明らかとなった。
- ・また、左岸護岸に河床に強いせん断力が発生し、護岸が損傷することが推察された。
- ・地域住民等が参加する情報交換会でシミュレーション結果



モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針



<アピールポイント>

①コミュニケーションツールとして期待

・河川シミュレーションは河川の流れ等を可視化でき、影響を科学的に把握できる

②相手の意見を聞く

・相手の意見をまず聞き、双方の重要性を認めること

③対話の場を持つ

・情報共有する「場」を設け対話することが必要